



No.30 (平成27年)

社会福祉法人 鶴風会
東京小児療育病院・みどり愛育園
西多摩療育支援センター
後援会

— 連絡先 —
〒208-0011
東京都武蔵村山市学園4-10-1
電話042-561-2521(代表)
東京小児療育病院

Eメール terh@kakufuh.com

理念

私達は
障害児者の生命機能の維持
向上と生活援助のための誠実に
積極的に取り組み障害児者と
その家族を支援します

1 頁 理事長のご挨拶
2 頁 第四十一回日本重症心身障害福祉協会
3 頁 日本小児神経学会優秀演題賞受賞報告
4 頁 第四十回日本重症心身障害学会学術集会報告
5 頁 虐待死児への対策は焦眉の急
6 頁 関東申信越静肢体不自由児施設長・事務長会議の開催
7 頁 西多摩たより
8 頁 オルフエの会 記念誌の発刊が無事に終えました
ご寄付者名簿

一方では高齢者がどんどん増え、高齢者の入所も増えてままならない状況です。わたしも高齢者の在宅患者を多勢かかえています。高齢の両親が障害児の介護をしているケースはゆるる老障介護にしばしばぶつかります。

理事長 中里 厚

新しい年を皆様如何お迎えでしょうか？
昨年は皆様方の御支援のお陰で社会福祉法人東京小児療育病院、みどり愛育園が創立五十周年、西多摩支援センターが創立十周年を無事迎えることが出来ました。

皆さん達が熱い思いで始めたこの事業も五十年のあいだ一日も安堵したことが無い多難な日々の連続でした。経済的そして人的な不足の連続の中から、障害者の自立支援のために、職員や利用者さん達が懸命な努力を重ね事業を展開してまいりました。

これも一重に今までこの施設を支えてくれた、後援会や利用者さんそして職員の皆様方のお陰と心より感謝申し上げます。

また五十周年の記念事業にも多大な御協力を戴きまして有難うございました。



病棟に飾られた「まゆ玉」

最近、日本の前向きな話題では、二〇〇三年五月に打ち上げられた小惑星探査機「はやぶさ」が二〇一〇年六月、九〇億kmの宇宙の旅から帰還しました。さらに昨年二〇一四年十二月には「はやぶさ二号機」の打ち上げに成功しました。この先二号機は二〇一八年にC型小惑星に到着し、一年半程小惑星に滞在したのち二〇二〇年に帰還する予定です。

私達の展開している障害者の医療もこの「はやぶさ」と同じで、様々な人達の協力が無いとなし得ない遠大で大変困難な事業です。

私達の施設が全国に先駆けて行った、国や自治体が当時手を出さなかつた重症児者の通園事業や在宅支援事業、地域への支援事業等当初はとても困難かと思われた事業ですが、何とか今日まで続けられたのも、皆様方の協力のお陰と思感謝いたしております。

第四十一回日本重症心身障害福祉協会

東日本施設協議会の開催

庶務課長 石井 昌之

一、施設協議会報告

会 期 平成二十六年十一月六日(木)

～七日(金)

会 場 ホテルグリーンタワー幕張

事務局 千葉リハビリテーション

センター愛育園

二、プログラム

・一日目

①特別講演一…「障害児者施設における虐待防止の取り組みを進めよう」

②特別講演二…「地域で支える 小児在宅医療」

③調査研究…「桜木園における 骨折調査」

・二日目(午前)

・二日目(午後)

三、ミニシンポジウム

「重症心身障害児者における重大な治療方針の決定プロセスについて」

①身寄りのない重症心身障害児者の 医療同意

②身よりがなくなっていく重症心身障害児・者の医療同意について DRPLA三家系の経験から

③症例提示と、いち医師として 考えること

④当園における対応…倫理委員会での検討、家族の御意向確認の仕方など

・二日目(午後)

四、施設見学

今回の会議を開催担当した千葉県立千葉リハビリテーションセンターへ施設見学に伺いました。

同センターは、社会福祉法人千葉県身体障害者福祉事業団を設立後、昭和五十六年に同県より肢体不自由児施設、同更正施設、内部障害者更生施設の経営を受託し、業務を開始しました。

現在は、リハビリテーション医療施設(病院) 百十名、医療型障害児入所施設定員百二十五名、医療型児童発達支援センター未就学児五組、成人通園五名、障害者支援施設五十六名、補装具製作施設があります。

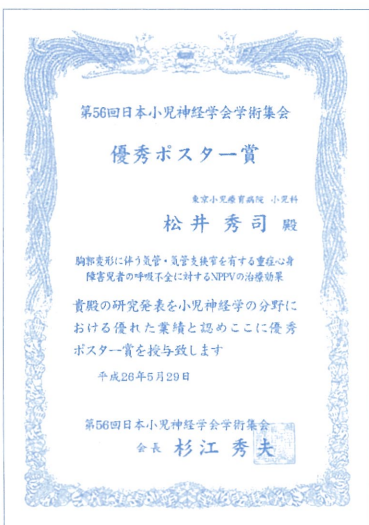
同センターは理念に「Everybody will be in town」誰もが街で暮らすために」を掲げて、身体に障害を有する方々の入院・外来診療または一定期間の入所により、高度の医学的、社会的及び職業的リハビリテーションを総合的に行い、ご利用者の社会復帰及び家庭復帰の促進をしております。また、同県の同種施設に対する技術的な助言や支援を行うセンター的役割を担った事業にも取り組んでいます。私共が施設見学した際も、ご利用者や職員の内い表情から、理念の実現に向けて日々の活動に取り組む様子を伺えたことが一番の収穫となりました。

日本小児神経学会優秀演題賞受賞報告

小児科 松 井 秀 司

第五六回日本小児神経学会学術集会は本年五月二十九日から三十一日まで浜松市にて開催されました。本学芸において、優秀演題賞(ポスター部門)を受賞しましたので、ご報告致します。発表演題は「胸郭変形に伴う気管・気管支狭窄を有する重症心身障害児者の呼吸不全に対するNPPVの治療効果」でした。NPPV(非侵襲的陽圧換気療法)はマスクによる人工呼吸療法のことであり、当院では主に在宅の利用者様の急性呼吸不全や慢性呼吸不全において使用し効果を認めています。これまで、学会発表や論文にてNPPVの有効性について報告してきました。昨年はプラクティカルガイド案の策定にも関わりました。NPPVの適応病態を明確にすることが今後の課題と考えており、今回、変動性の筋緊張を有する重症児における治療効果について発表しました。変動性の筋緊張を有する場合には、頸部後屈や胸郭変形を生じることも多く、その場合、上気道のみならず、気管・気管支の狭窄・扁平化を生じ、筋緊張亢進時に呼吸困難や喘鳴がみられます。通常、上気道狭窄に対して、気管切開等が検討されますが、NPPVは過緊張や分泌物が多いといったことを理由に治療法として検討されることはあまりあ

りません。ただ、上気道狭窄に対し、気管切開を施行しても、気管・気管支狭窄合併例では呼吸症状に対して十分な改善は得られず、むしろ気管・気管支狭窄が増悪し、人工呼吸器の継続使用が必要となる場合があります。一方、NPPVは、夜間のみ使用であっても、胸郭変形に伴う換気障害と気管・気管支狭窄症状が軽減し、呼吸状態の安定や覚醒レベルの向上が得られる場合があります。このことから、NPPV導入を検討する意義はあると考えます。NPPVによって呼吸困難が軽減した結果、過緊張の軽減が得られる場合も経験しています。今後、使用経験を積み重ねることにより、知見をさらに深め、呼吸障害に対する治療法の一つとして利用者様に提供できるようにしていきたいと思っております。



第四十回日本重症心身障害学会学術集会報告

東京小児療育病院院長 椎木 俊秀

平成二十六年九月二十六日から二十七日にかけて京都市で第四十回日本重症心身障害学会学術集会が開催されました。会長は国立病院機構南京都病院長の宮野前健院長が務められ、約千二百名が参加しました。

1 プログラムは以下の通りです。

1 特別講演1
重い障害のある人の
生きるよここびと「生命倫理」

2 特別講演2
赤ちゃん学から見た重症心身障害
小西 行郎 同志社大学赤ちゃん学
研究センター教授

3 教育講演
i P S 細胞を用いた疾患研究
— 神経変性疾患を中心に —
井上 治久 京都大学 i P S 細胞研
究所教授

4 シンポジウム1
障害者総合支援法からみた
重症心身障害、その課題と方向性
シンポジウム2
重症心身障害児(者)を支える
職種の専門性向上
シンポジウム3
利用者の権利・最善の利益と
治療方針決定
シンポジウム4
地域生活と医療的ケア
快適に生きるための課題とこれから

5 ランチョンセミナー1
重症心身障害児(者)における
低カルシウム血症のリスク管理
ランチョンセミナー2
呼吸リハビリテーションにおける
IPV(肺内パーカッションベンチ
レーター)
7 一般演題
8 ファッションショー

特別講演1では重症心身障害の方々が生きていある生活をするためには、「快」、「不快」という感覚が大事で、その基本になるのは人間関係であり、双方向的な関係を通じて「快」を感じてもらおうことの必要性を強調されました。その立場から、人格は自己意識と理性を持つ人にならないとし、重度の障害者などの尊厳を否定する「パーソン論」などの風潮に対して強い警鐘を鳴らされました。

特別講演2では赤ちゃん学会の設立の目的は心の発生・発達に科学的に迫ることであり、医学、心理学以外にも物理学、情報工学などの研究者も参加して文理融合の新学術領域研究を目指していることが語られました。重症心身障害の研究ももっと科学的に行うべきとの提言を頂きました。

シンポジウム3は施設に長期に入所されている身寄りのない方が手術などの侵襲的な処置が必要になった場合の判断を誰がどのようにすべきかという質問に端を発し、急遽企画されたものでした。医

師、家族、医療倫理学者、弁護士の方々によって活発かつ興味深い議論が展開されました。特に家族であり、生命倫理に関する著書も多数上梓されている児玉真美さんの話は印象深いものでした。ご自身の経験に基づき、重度の障害児者を医師は「点」として見がちだが、家族にとっては「線」である、看護師や生活支援員は「いる人」だが、医師は「来る人」である、など医師に対する率直な意見を述べられました。会場から「必ずしもそのような医師ばかりではない」という意見も出されましたが、医師として心しておくべき指摘だと感じました。その他、興味深い講演や発表がたくさんあった学会でした。

来年は私が会長を務めることになりました。プログラムの概要は以下の通りです。有意義な学会になるよう、今準備を

進めているところです。

【日程】二〇一五年九月十八日(金)

十九日(土)

【会場】一橋大学一橋講堂

【テーマ】

重症心身障害支援の現在・過去・未来
～貢献と課題について考える～

【プログラム案】

◎基調講演

「重症心身障害への医療的支援の現在・過去・未来
～貢献と課題について考える～」

北住映二先生 心身障害児総合医療療
育センターむらさき愛育園 園長

◎特別講演 「障害者とともに生きる」
連続と不連続の理論

仁志田博司先生 東京女子医科大学名
誉教授

「連続と不連続の理論」

「連続と不連続の理論」

「連続と不連続の理論」

「連続と不連続の理論」

「連続と不連続の理論」

第41回 日本重症心身障害学会 学術集会

The 41st Annual Meeting of the Japanese Society on Severe Motor and Intellectual Disabilities

重症心身障害支援の 現在・過去・未来
～貢献と課題について考える～

会期 2015年9月18日(金)～19日(土)
会場 一橋大学一橋講堂 (東京都千代田区一ツ橋)
会長 椎木 俊秀 (東京小児療育病院 院長)

基調講演 重症心身障害への医療的支援の現在・過去・未来
～貢献と課題について考える～
北住 映二 (心身障害児総合医療療育センターむらさき愛育園 園長)

特別講演 障害者とともに生きる：連続と不連続の理論
仁志田 博司 (東京女子医科大学名誉教授)

演題募集期間 ▶ 2015年5月1日(金)～6月10日(水)
事前参加申込期間 ▶ 2015年6月1日(月)～8月10日(月)
<http://www.procomu.jp/smid2015/>

【第41回日本重症心身障害学会学術集会事務局】
東京小児療育病院 総務部 〒208-0011 東京都葛飾区村山9-10-1 TEL 042-561-2521

【第41回日本重症心身障害学会学術集会運営担当】
株式会社プロコムインターナショナル 〒115-0063 東京都江東区有明3-6-11 TEL ビル内9階
TEL 03-5520-8821 FAX 03-5520-8820 Mail: smid41@procomu.jp

虐待死児への対策は焦眉の急

会長 五島 瑳智子

年齢が高くなるにつれて、怒ると皺が増え、血圧も上がるので健康上よろしくないという通説に従うわけでもないのですが、怒りは体力、気力を消耗することは確かなので、近頃はなるべく怒らないようにしています。

それにしても近頃の幼児虐待は目に余るものがあり、このことについては怒らないほうがおかしいとさえ思っています。

自分の子供、しかも乳幼児に対する虐待は「しつけ」と称して食事も与えず、真冬に薄着のままベランダに閉め出したり、家に閉じ込めて何日も帰宅しなかったり。餓死した幼児を司法解剖してみると胃腸内から、食物ではないアルミ箔や蠟、玉葱の皮などが検出され、どれ程空腹で耐えられなかったかと想像するだけで身震いするほどの怒りがこみ上げてきます。子供は親を選ぶことができません。虐待されても助けを求めるのは親の資格のない加害者の親しかいないのですから、周囲が気付いて通報しなければ助かる道はないのです。

新潟では母親に抱き上げられ、橋の上から川に投げ落とされた三才の幼児。ど

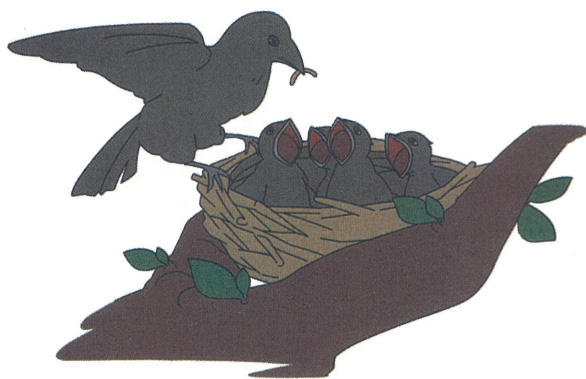
れほどの恐怖と絶望の中で溺れ死んだかと思うと、血管が破裂しそうな怒りと、暗澹たる思いに襲われます。

最近、ダーウィンが来たというNHKのテレビで、鳶が夫婦で子育てをする情景を紹介していました。しつこい鳥の攻撃から卵や雛を守りながら、交替で餌を捕りに行き、雛が巣立つまで続ける子育ての記録は、けなげで美しいのです。

厚生労働省の調査によれば、虐待によって死亡した十八才未満の子供は二〇〇三年十月から二〇一三年三月までの一〇年間に五四人、このうち四四％の二四〇人が一才未満の乳幼児だったとのこと、さらに生後一ヶ月未満の虐待死児の加害者は九一％が母親だったというのです。

日本が大家族時代には、母と子が二人きりにならないので、家族達の複数の目で、幼児は見守られてきたのでしょう。核家族時代になって、育児は未熟な母だけで行なければならず、母としての自覚もスキルもないままの子育ては破綻し易いのかも知れません。しかしこの恥ずべき虐待死の現状は、単に加害者の親の処罰を重くするだけでは解決しないでしよう。警察は虐待による死亡や障害の事実

がないと介入し難く、虐待死に至ってからは遅いのですから、地域社会が早い時期から介入できるような具体的方策が必要で、そのためには、子育てを社会全体で受けとめる方向への意識の改革も焦眉の急と思うのです。



関東甲信越肢体不自由児

施設長・事務長会議の開催

総務部経理課長 乙幡 和明

平成二十六年十一月十三日(木)〜十四日(金)の二日間の日程で、栃木県のとちぎリハビリテーションセンターの主催により、栃木県宇都宮市のホテルニューイタヤにて開催されました。開催初日の午前十時からは信濃医療福祉センターの主権により民立民営部会が開催されました。民立民営の施設、九施設の施設長・事務長が一同に会し、意見交換を行いました。

はじめに、信濃医療センターの施設長様から、平成二十七年年度に改定される障害福祉サービス給付費について、厚生労働省への要望内容等の報告、リハビリテーションについて報告がありました。各施設活発な意見交換がありました。

協議議題では、

- ① 法人本部の設置について
- ② インシデント・アクシデント報告の取扱いについて
- ③ 社会福祉法人の社会貢献活動について
- ④ 重症児の医療点数の割合が高くなるなか肢体不自由児を抱える施設は今後どういった運営が求められるか

この4項目について、各施設の取り組み状況や施設の方向性について意見交換が

ありました。

本会議の施設長・事務長会議は午後一時三十分より、十五施設の施設長、関係者が出席し開催されました。定例の報告として、

- ①午前中に開催された民営部会の報告
- ②本年度の関東甲信越静肢体不自由児施設療育研究部会の報告
- ③平成二十五年度会計報告及び監査報告がありました。続いて協議事項について、意見交換を行ないました。

- 協議議題は、
- ①家族の再統合について
- ②入所の係る契約と措置について
- ③入所児に係る個別の余暇支援プログラムのについて

四議題について、各施設の取り組み状況を報告し活発な意見交換が行なわれました。会議終了後、一七時三十分より懇親会が行なわれ、情報交換を行ないました。翌十四日（金）は、主催施設のとちぎりハビリテーションセンターの施設見学がありました。

とちぎりハビリテーションセンターは、乳幼児から高齢者に至るまでの幅広い年齢層に対応した複合施設です。児童福祉施設は『こども発達センター』『こども

療育センター』障害者支援施設『駒生園』

回復期リハビリテーション医療を行なう『リハビリテーション病院』『障害者総合相談所』で構成された施設です。特別支援学校『わかさき特別支援学校』が併設されています。

林に囲まれた広大な敷地にあり、この時期、紅葉が見ごろでお散歩コースもあるようです。

この会議は、全国肢体不自由児施設運営協議会の加入施設による、関東・甲信越・静岡ブロックの施設が一同に会して行なわれている施設長・事務長会議です。各施設が児童福祉施設としての障害児の総合的な医療・療育のサービスを提供し、社会が求めるニーズに応えるよう、いろいろな問題について各施設との協議、情報交換を行ないながら各施設がおかれた立場で今後も発展して行くことを望みます。



西多摩だより

先日、あきる野市役所市民コミュニケーションセンターホールで、障害者作品展があり、西多摩療育支援センターの利用者も出展いたしました。この機会に、西多摩療育支援センターが建っているあきる野市の紹介も兼ねて報告させていただきます。

あきる野市は、旧秋川市と旧五日市町が合併する形で一九九五年に発足したまだまだ新しい市です。皆さんが五日市と聞いて、思い浮かぶのはハイキングやパーベキューなど手軽に出かけられるレジャーの場としてではないでしょうか？

実際に西多摩療育支援センターの屋上から望む風景は、三方を山で囲まれ、東京とは思えないような情景です。その反面、高速道路である圏央道が市内を縦断し、隣接する日の出町には大型ショッピングモールが展開するなど、大規模な開発の恩恵にあずかる結果にもなっています。西多摩療育支援センターは、この地域の障害児者の療育の拠点としての役割を果たせるように努力しております。

そのあきる野市の中心である市役所で、昨年の十二月一日〜十二日五日に障害者作品展が開かれました。西多摩療育支援センターの入所や通所を利用している皆さんの作品も展示され、多くの方々会場を訪れていました。また、地域にちなんだ作品なども紹介され、見学をした利用者の皆さんも満足された様子でした。



利用者さんの出展作品

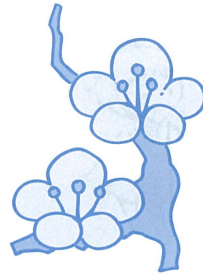


チャリティコンサート オルフェの会

平成二十六年十二月七日（日）グランドプリンスホテル新高輪・翠雲・国際館パミール「香雲・翠雲」に於いて後援会主催のチャリティコンサート「オルフェの会」が開催されました。第一部では、ご来賓を代表して炭山嘉伸先生（東邦大学理事長）ご挨拶、松田診療部長から鶴風会の施設活動状況の報告がありました。第二部のコンサートでは、アンサンブルブルーローズによる「荒城の月」「オー・ソーレ・ミオ」など日本と世界の抒情歌、またオペラ、オペレッ



タの名場面から、歌劇「カルメン」闘牛士の歌、歌劇「蝶々夫人」ある晴れた日などを披露していただきました。最後に全員で、東日本大震災の復興ソングである「花は咲く」を歌い、盛会裡に終わりました。



記念誌の発刊が無事に終えました

編集委員会 大塚周二

社会福祉法人鶴風会・東京小児療育病院・西多摩療育支援センターが創設されて慶寿の節目にあたる五十年目、十年目をそれぞれ迎えることができました。記念すべき五十年間の史跡をどのような形で集約し記念誌に残せるか編集委員会で幾度も話し合いを持ち、方向としては表紙を開いて様々な思い出を浮かべながら歴史をひも解く気持ちになるよう写真に多く取り入れてビジュアル的な構成に決められました。

まず方針に沿って約二百ページの台割の作成を行い、各関係者へ原稿の執筆をお願いしました。執筆の割り振りで一番大変であったのは年表と歴史編で誰に執筆依頼をするか？特に開院当時の出来事を知る方は少なく困っていたところ編集委員である五島先生が私ししかいないでしょう？と申し出られ快く引き受けてくださり安堵致しました。

年表や歴史の流れをまとめるのに必要な秘蔵写真を探すのに大変苦労しました。偶然、倉庫に保管されているアルバムを見つけたのですが、写真に汚れや変色があるので同封されていたフィルムをネガをデジタルに再製してから掲載したり、写真撮影ではダメだしの写真が発生し再度写真の撮り直しをするという事もありま





社会福祉法人 鶴風会 後援会 だより

次世代に将来を託す

医師 中野 弘一

理想とする考えや思いの中で、実現しやすいものであれば、自らが努力や工夫することによって自らの世代で、ある程度は到達できる。しかし先人から受け継いだ願いを発展させるには、次世代の力を借りなければ容易に到達できないことは少なからず存在する。いや私たちの活動している医療の場にはこのように容易には到達しえない課題がたくさん残されている。

鶴風会が取り組んでいる東京小児養育病院運営事業も容易に到達しえない課題であり世代を渡り、五十年間多くの方々が必要とされ、それぞれの思いをのせ発展させてきた。よいこと当たり前のことを成就するにも、多くの困難や努力が必要なのは理不尽にも思えるが、世の道理でもある。今後も起こるかもしれない幾多の困難を踏み越えていくためには、志を同じくする私たちが集い力を合わせ、努力するしか志を成就する方法はない。微力ながら私も思いの成就に力を尽くしたい。

私が医学部六年生の時の出来事である。神経内科の初診外来の陪席実習があった。新患が来診すると病歴を取り、仮の診断を自分なりに考えて記述し、診察をお願いする。来診していたクライアントは筋力低下を主訴にした中年男性である。筋

力の低下は徐々に悪化している。糖尿病と白内障も指摘されている。一元的にと考え糖尿病性の障害と整理しプレゼンした。確かに前頭部脱毛を伴う違和感のある顔貌ではあったが、私には診断を示唆しているサインには見えなかった。指導の初診医は私が診断への道に迷っていることがわかりどうガイドしようかの思案している様子は学生といえども察知できた。

先生は説明なさらず、診察用ハンマーで母指球を叩打した。すると特有の筋強直が母指球に出現した。診断は筋強直性ジストロフィーであることは初学の学徒である私にも分かった。病歴聴取時には思いもよらなかった。ケースを通じて、知ることを前提に、体系的に推論すること、仮説演繹を組み立てることを教えていただいた。その時の初診医が当時第四内科の中里講師、現理事長である。三十八年前の東邦大学大橋病院の内科外来の臨床実習での出来事である。

今、中里先生に学び方を教えていただいた私が東邦大学に在職し、私の次世代に研究のころえを教える役目を預かっている。私の次世代に、中里先生の次々に臨床、研究そして社会貢献への真摯な思いを継承していく。そして自らが成就しえなかつたよいことまた当たり前のことが成就させていくことを次世代に託したい。

平成26年度

チャリティーバザー

昨年十月十九日(日)に、施設改修等の資金の確保を目的としたチャリティーバザーを開催しました。

「やっと晴れたね」「暑いくらいだね」とお声をかけていただくような昨年、一昨年と打って変わった快晴となり、いままでの鬱憤を晴らすような、パワフルなバザーとなりました。去年より始めた餅つきで杵が餅をつく音も、心なしか力強く聞こえた気がしました。

大変ありがたいことに、会場前にもかかわらず、長蛇の列ができるほどお越しいただきました。その数は、毎年お配りしている整理券二五〇枚が無くなってしまうほどでした。

そんな当日お越しいただいたお客様と、会社・団体等ならびに個人様から多くの御協賛を頂き、二〇〇万円を超える収益となりました。

この収益金は、次年度より本格的に始まります病棟1階部分の改修をはじめとした、施設改修等の資金に充てさせていただきます。

経済情勢は依然厳しいといえますが、そのなかにありながら、ご支援賜りました皆々様に深く感謝申し上げます。



父母の会の力強い餅つきと興味津々に集まるお子さんたち



快晴に見守られ活気に満ちたバザー会場

鶴風会後援会へ(寄付者)芳名

平成26年7月～平成26年12月

189名(五十音順・敬称略)

- 相澤 公子・青木 悦・青木りう子
- 浅見 信哉・蘆立 かつ・足高 毅
- 東 恵子・足立 嘉子・阿部 正和
- 安部 良治・有村 章・飯田美保子
- 石北 壽子・五日市 敬・伊藤 文子
- 伊藤 元博・猪俣賢一郎・梅田 嘉明
- 大久保陽一郎・大塚 慶子・荻原 泰
- 小原 明・小原 桂子・笠原 綾子
- 鹿島田忠史・勝見 千明・加藤まこと
- 加藤 葉子・金森 勝士・金親 正敏
- 金子 明寛・金子クニ子・鎌田 昭次
- 唐澤 重徳・河村 康明・河村 裕子
- 菅野 壽子・菊池 信彦・菊池 洋子
- 鬼頭 秀明・木山 博夫・久保 初美
- 久保 博・倉根 理一・黒木 貴夫
- 黒瀧 俊彰・月花 亮・小泉 蒼子
- 小澁 達郎・後藤加寿美・小林 寅喆
- 小林 静江・小林純二郎・斉藤 伸行
- 斉藤 康子・佐多 由紀・佐藤 和子
- 佐藤 重雄・佐藤 裕美・志鳥眞理子
- 渋谷 和俊・島田 長人・島野 光
- 白坂 智子・新谷 義克・杉 薫
- 杉原 明子・杉本 寛子・鈴木 秀明
- 宗 恒雄・莊子 英彦・高木 芳夫
- 高槻 義夫・武居 正郎・武田 晶子
- 武田 朋子・多胡 博雄・田中 政信
- 田中 リナ・田部 秀山・田宮 親
- 塚越 実・堤 俊一郎・戸倉 夏木

- 豊田 道子・長岡 貞雄・長澤 貞継
- 中谷 尚登・中野 敏江・中村ちなみ
- 並木 温・西宮 常代・二瓶 浩一
- 能谷 正雄・能戸 保光・延 明子
- 野村 直子・橋口 玲子・花岡嘉奈子
- 早川 浩市・林 佳子・原 まどか
- 原田千鶴子・原田裕美子・樋口志津子
- 土方 淳・平田 徹・深沢 規夫
- 藤牧 賢治・星 恵子・星 北斗
- 増田登志子・松橋 求・松橋 京子
- 松原 龍弘・松本 章・松本 英亜
- 松山 潤一・丸山 和子・三坂 直温
- 水野 孝子・水吉 秀男・水野 惇子
- 三登 和代・三宅 三・向山 徳子
- 武者 芳朗・村川 公一・村川世津子
- 森 克彦・森 紘子・盛川 温子
- 森澤 豊・安土 達夫・山中みよ子
- 山村 憲・山本 温子・山本 高裕
- 湯澤 俊・吉見 梓・龍 倫之助
- 日本女医会東京支部
- バザー寄付
- 板橋 理恵・今井 久吾・入江チヨ子
- 岩本 敦子・海老原健介・大館 一彦
- 大谷 定之・大塚 いく・大塚 孝司
- 大場 幸延・小川 昭子・菊地 由美
- 北村 忠治・小泉みよ子・斉藤 雅彦
- 佐藤 宣・篠 昌治・渋谷麻利子
- 鈴木 美帆・鈴木 康之・関口 義明
- 関根 貞子・関根 雅弘・多賀 敦子
- 高橋 京子・鷹羽 咲枝・中里 厚
- 長瀬 守彦・野沢 和弘・浜中知恵子

松山 穂豊・守田 正三・柳 恵子

- 山崎 房子・山谷 敏男・渡辺 安臣
- 上岡 謙夫・上岡 正子・清宮 祥子
- 通園みどり保護者会・NPOわらべ
- ㈱エクセル・サービス・㈲タケナカ
- 第一生命 三上文江・八王子建物管理㈱
- 比留間豆腐店

社会福祉法人鶴風会(寄付者)芳名(法人団体個人)

平成26年6月～平成26年11月 19名(五十音順・敬称略)

- 阿部美代子・大場 幸延・加藤奈津子
- 金澤 昭・上岡 謙夫・佐藤 清子
- 清水 幸一・高橋 孝彦・竹内 雅人
- 竹中 幸宏・田中 淳子・西原 憲二
- 森田 英雄・守田 洋・吉川 芳登
- 東京小児みどり父母会・社会福祉法人
- 鶴風会後援会
- あきる野学園なつまつり実行委員会
- ㈱幸和義肢研究所

五十周年記念事業募金(寄付者)芳名

平成26年7月～平成26年12月 18名(五十音順・敬称略)

- 猪俣賢一郎・今井 久吾・海老原明次
- 加藤 大・加藤 光子・河津 緑
- 坂本 芳美・高安 雅樹・塚田スミ子
- 根本 暁・深澤 保子・松島 英乃
- 宮川千鶴子・守田 正三・横山 アミ
- 楽満 礼子・高橋工業㈱・中村建設㈱

編集後記

表施設が五十周年を迎えました。私が就職した時に十五周年でしたが、この施設ですとお世話になり、孫ができる歳になりました。私も今でいう育メンでしたので、孫と一緒にいると自分の子育てと重なってとても懐かしさを覚えると同時に、こうやって世代が受け継がれていくのだと感じています。この病院も伝統を守りつつ革新をしていくことを繰り返しながら世代も交代してはいますが、理念を基にさらなる発展に向けて努力していきますので、後援会の皆様におかれましても、今後とも世代を超えたご支援をよろしく願います。

編集委員会



50th Anniversary
Tokyo Children's Rehabilitation Hospital
10th Anniversary
Nishitama Habilitation Support Center
KAKUFUKAI